

# 学位論文要旨

学位論文題目 現代中国における社会変容と苗族の宗教的職能者  
——貴州省黔东南州台江县施洞鎮の苗族の文化人類学的研究を事例として

申請者氏名 曹 紅宇

本論文は中国西南部に位置する貴州省黔东南州苗族トン族自治州台江县施洞鎮におけるフィールド調査に基づき、現代中国における社会変容と苗族の宗教的職能者について文化人類学的に考察したものである。本論文は、中国また苗族社会が社会的・経済的に変動しつつある時代の中で、現地社会においてゴウハンハン、ゴウハンシツアと呼ばれる宗教的職能者はいかなる役割を担っているのか、あるいはゴウハンハンが果たす役割が変容する社会状況の中でどのように求められているのかを明らかにした。各章の概要は以下の通りである。

序章では本論文の立場を示した。本章では、従来の呪術・宗教研究が見過ごしてきた呪術に関する事象を苗族社会に対象化し、とりわけ呪術・宗教的行為を行う宗教的職能者に着目する必要性を提示した。また、調査地の概要、調査対象者、フィールド調査の概要等を示した

第1章では、苗族（南方地域に居住する民族）の宗教的職能者を学術的な議論の中でシャーマンと同一視するものが多く存在していることを提示し、中国のシャーマニズム研究の現状から南方少数民族の宗教研究の中で、すべてをシャーマニズムの視点で行うことは苗族に関しては適切ではないとことを明記した。少数民族に関わる宗教をとらえるには、現地社会に根差した「生活」から考察する必要があることを示した。

第2章では、ゴウハンハンの継承について考察を加えた。急激な社会変動に伴う少数民族の信仰体系の崩壊が危惧される中、とりわけ、少数民族にとって宗教的職能者の後継者不足が深刻な課題とされるようになってきている。本章では施洞鎮のゴウハンハンがいかにかこのような状況の中で継承されているのかに着目した。父系出自が強く意識されている苗族社会の中で、調査から得たデータを基に継承を、父系継承、二重継承、弟子入りの3つに類型化し検討を行った。その結果、苗族社会における父系理念が強く意識されているに加え、宗教的職能者の系譜を引くかどうかも後継者の有無を大きく左右しているこ

とが明らかになった。

第3章では、ゴウヒャンシツアの呪術・宗教的实践に着目し、主に急速に現代化、技術革新する社会状況の中で、治療側（宗教師）と被治療側（クライアント）の関係の変化を明らかにした。ここでは両者の関係の変化を非対等的関係から対等的関係というようにとらえ、これを苗族社会における呪術・宗教的实践の現代化への適応という視点で分析した。先行研究の多くは、治療側と被治療側の関係は非対等的であるとしてきたが、本章ではそれを再考した上で、現代的適応として整理し、呪術研究に対して新たな視座を提供した。

第4章では、固有の文字を持たない現地社会で、漢語の文字の読み書きができる（リテラシーのある）ゴウヒャンヒャンについて考察した。無文字社会である苗族社会に、口頭伝承の担い手であるゴウヒャンヒャンが漢語テキスト、つまり文字を伝統的な儀礼の中に持ち込むようになってきた。ただ、これはテキストを口承より優れたものとはしているわけではなく、儀礼に効果があればゴウヒャンヒャンが実践するというもので、活動自体は伝統的な儀礼でもあっても、儀礼を行う上でのリソースのひとつとして口承の内部にそれを入れ込んでいただけであることを明らかにした。

世界各地の無文字社会における文字の使用は、個人或いは役割を持つ者の特権や権威として議論される傾向が強かった。しかし、中国西南部の苗族社会の人々は、少なくとも2019年時点の施洞鎮の苗族社会では、ゴウヒャンヒャンが文字を使用することで権威があると断定できないことを示した。

第5章では、「近代化」が進む社会状況の中で、伝統的な苗族社会において人々が経験的知識を生かし、その知識に基づいて不確実な社会と対峙して未来に向き合っていることについて考察した。現地の人々は常に日常的にさまざまな不確実性を実感している。新たに生じた観光開発によるインフラ整備が進む社会状況の中で、現地の人々は不確実な未来に直面しつつ、今まで通り伝統的な儀礼を行い、不確実性と対峙しようとしている。これは苗族社会における不確実性に対し、ゴウヒャンヒャンを通じて未来を予測可能／不可能とは別の次元に見出す作業であることを示した。

終章では、以上の考察から、今までシャーマニズムの領域で議論されてきた苗族の宗教的職能者の実態および当該社会での重要性を指摘した。無文字社会で在り続けてきた苗族社会が「近代」と接触する中で、ゴウヒャンヒャンは継承の危機に晒されているが、彼らは不確実な諸状況を調整しながら、現地の人々に一貫して呪術・宗教的な役割を果たし続けていることが明らかになった。

## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 139号	氏 名	曹 紅宇
論文題目	現代中国における社会変容と苗族の宗教的職能者 —貴州省黔东南州台江县施洞鎮の苗族の文化人類的研究を事例として—		
<b>(論文審査概要)</b>			
<p>博士論文は序章と終章を含む7章で構成されている。博士論文で調査対象となっているのは、中国貴州省黔东南州台江县施洞鎮の苗族社会における宗教的職能者であり、2020年現在における苗族社会の変容と宗教的職能者の社会的意義を民族誌的に記述している。調査対象となった村落内には、ゴウヒャンヒャンと呼ばれる司祭とゴウヒャンシツアと呼ばれるシャーマンが存在し、彼らが社会状況に応じて、それぞれの役割を果たしている様が描かれる。とりわけ重要なのは、現在まで「無文字」文化を保持してきた苗族社会の人びとが、これらの宗教的職能者を通じて、どのように「近代化」と対峙するかという部分であるが、本論では生業形態の変化、市場経済化、識字率の増加、観光開発などに直面する中で、苗族社会の人びとと宗教的職能者が協働し、苗族的世界観を再構築している様が描かれる。その中で宗教的職能者の社会的意義が再確認される状況が明示される。</p> <p>序章と終章を除く各章の概要は以下の通りである。第1章：中国におけるシャーマニズム研究と苗族社会における宗教的職能者、では20世紀以降のシャーマニズム研究の系譜を紐解きながら、中国におけるシャーマニズム研究史を批判的に検討している。中国におけるシャーマニズム研究が、北方民族における事象を中心に構築されてきたこと、また政治的に成立宗教以外の宗教活動を「迷信」と位置付け、主たる研究対象から外されてきたことを論じ、苗族における民俗的宗教活動の研究意義を、研究史における空白という観点から鋭く指摘している。現在、苗族社会における宗教習俗に関する研究は、文化資源化の傾向と非科学的習俗という見解に二極化されているとしたうえで、本論はそのいずれにも与さず、民族誌的に現代中国における社会変容と苗族の宗教的職能者を明らかにすることが主張される。</p> <p>第2章：苗族社会における宗教的職能者の継承形態からみる父系理念、ではゴウヒャンヒャンと呼ばれる宗教的職能者の継承が、3つの類型から考察される。1つ目は父系継承であり、これは父子連名においても明示される。2つ目は二重継承であり、自身と異なる父系の師匠の下で改めてゴウヒャンヒャンとしての技能を習得するものである。3つ目は弟子入りであり、弟子入りは元来ゴウヒャンヒャンの系譜でない者が、ゴウヒャンヒャンの系譜に加わることを意味する。この3類型から、一方でゴウヒャンヒャンの継承体制の柔軟性が示されるが、他方である境界も明示されることになる。それは父系観の重要性であり、弟子入りの場合、父系継承と二重継承では存在しなかった儀礼を要することが指摘され、ゴウヒャンヒャンの継承において父系観念が非常に重要であることが明らかとなる。</p> <p>第3章：現代苗族社会における呪術・宗教的実践の現代的適応、ではゴウヒャンシツアと呼ばれる宗教的職能者に関する議論が展開される。ゴウヒャンシツアは、いわゆるシャーマンとしての役割を担っている存在であり、自身の身体を用いて靈的な力を顕現させるセナンという儀礼を人々に提供する。本章では複数のセナン儀礼の事例をもとに、ゴウヒャンシツアとクライアントが協働的に苗族的世界観を構築することが描かれる。また市場経済化により、ゴウヒャンシツアが活動の場を広げると同時にクライアントがゴウヒャンシツアを「選択」できる状況が示され、ゴウヒャンシツアとクライアントが対等化しつつある現状が示される。しかし一方で、両者の交流が加速することによって苗族的世界観が減衰するのではなく、共有される場、接点の拡がりによって継承されることが指摘される。</p> <p>第4章：現代の苗族社会における漢語テキストとリテラシー、では「無文字社会」である苗族社会において漢語テキストが浸透することによって、これまで声の文化に根差していた苗族の宗教活動に変化が起きていることを指摘する。ゴウヒャンヒャンの儀礼は、口頭伝承が基本となるが、ある場面においては漢語テキストが用いられることを指摘する。だが漢語テキストの利用は限定的であること、リテラシーを権威として利用していないことから、あくまでも口承の実践におけるリソースのひとつと位置づけ、声の文化におけるテキストの利用であるとする。</p>			

第5章：現代苗族社会における不確実性と儀礼行為、では苗族社会が観光開発といった行政主導の急激な社会変容の波にさらされる中で、ゴウハンハンが行うゴウホ儀礼を通して、不確実性を苗族的世界観の中に再配置する様子が描かれる。人々は、日常生活における吉凶禍福の判断を定期的（あるいは不定期）にゴウハンハンに預けることにより、不確実な未来への積極的な参与を試みる。それは現在の社会状況という既定条件から導き出される不確実な未来ではなく、苗族的世界観における過去と未来から導き出される連続性の中にある。この実践において、ゴウハンハンが苗族社会において不可欠な存在であり続けたし、これからもそうであろうことが指摘される。

論文の序章と終章では、これまでの先行研究の限界点を提示した上で、研究史における本論の位置づけが示される。近年、文化人類学において呪術研究の多くは、近代と呪術という観点からアフリカの報告が多くなされ注目されてきた。本稿は社会主義市場経済という特異な政治状況のもと、苗族という「無文字社会」が近代と対峙した際に、宗教的職能者が果たしてきた役割を十分かつ適切に描き出すことができたと考えられる。

以上の内容から、審査委員会は本論を以下の要件を十分に満たし、達成したものと考える。

1. 創造性：20世紀以降の文化人類学的研究の系譜を丁寧に整理した上で、本研究課題の意義を提示した上で、苗族の呪術研究に対して、複数の観点から独自の視点を提供している。
2. 論理性：本論は先行研究の整理、提示の仕方、論証において適切な手続きがなされており、審査委員会および外部審査委員は議論の展開のあり方に問題がないと判断している。
3. 厳格性：先行研究が十分に渉猟されており、オリジナルの一次資料に関しても適切に提示されている。予備審査の際に指摘があった、ポラード文字に関しても適切な対処がなされている。
4. 発展性：本稿は苗族社会におけるゴウハンハンとゴウハンシツアと呼ばれる宗教的職能者を対象に民族誌的研究が行われている。本研究は、「無文字社会」と近代の接触、社会主義市場経済における宗教活動、民俗的知識におけるリスク論という点に関し、今後も大いに発展する可能性を有したものと考える。

以上より、本研究課題「現代中国における社会変容と苗族の宗教的職能者」は十分に達成されており、博士論文として文化人類学に留まらない学術的意義を有する論文として評価できる。

論文審査結果

合・否

審査委員

(氏名) 小林 宏 豆

(氏名) 高 木 育 見

(氏名) 谷 部 真 吾

(氏名) 横 田 尚 俊

(氏名) 森 野 正 弘